

発刊のあいさつ

浦添市教育委員会教育長 保久村 昌 伸

浦添市教育委員会は、一九八七年度（昭和六十二年）に『琉球王国評定所文書』第一巻を刊行し、昨年度までに既に五巻を刊行しております。これまで琉球王国の近世史にとって重要な文書であるという高い評価を得ながらも、同文書は断片的にしか翻刻出版されませんでした。当教育委員会では、現在確認されている全史料を『琉球王国評定所文書』全十八巻として刊行する予定です。

浦添市は、歴史的には「うらおそい」の言葉にも示されるように、沖縄本島の政治の拠点として栄え、特に大交易時代と称される時期には中国等とも貿易を行っていました。このような「国際性ゆたかな文化都市」をめざす文化事業の一環として「琉球王国評定所文書」刊行事業を推進しております。

本事業が琉球・沖縄歴史の研究の発展にいささかなりとも貢献することになれば、これに過ぎる喜びはありません。本事業の遂行にあたっては、新たな史料発掘作業を始めとして幾多の困難が予想されますが、各位の従前にまさるご理解とご協力によって、その完遂を期したいと決意しています。

「琉球王国評定所文書」第六巻では東京大学法学部法制史資料室所蔵の琉球評定所記録（旧琉球藩評定所書類）の中から旧琉球藩評定所書類目録の番号に従って目録番号一四七〇号～一五〇〇号の八文書を収録しました。史料の大きな内容としては、一八五二年（咸豊二）から一八五三年（同三）までの二年間のものです。

本巻では、一八五二年に八重山に漂着した英国船ロバート・バウン号に関わる事件の顛末が一四九八号・一五〇〇号と二つの文書にわたって述べられています。ゴールド・ラッシュの時代、カリフォルニアへと中国人苦力(クーリー)を運んでいたバウン号は、石垣島沖で座礁しました。そのバウン号でおきた中国人達の反乱と、それを押さえるための英船からの砲撃で多くの中国人が死にました。彼らは石垣島の「唐人墓」にまつられています。琉球側は、逃げてきた中国人達をどう扱うかで、英国・中国という二つの大國間でのバランスを取るべく方針を選択していきます。また、ベッテルハイムと首里王府、中国・英国との間で交わされた書簡を薩摩へ見せるために和訳した文書もあります。いずれもこの時期の微妙な琉球の立場を明らかにする重要な文書といえます。

以上のことから伺われますように、本史料は琉球・沖縄歴史の解明の上で重要な史料になるものと確信しております。多くの市民をはじめ研究者の間で広く活用されることを願っています。

最後に、本事業のために貴重な資料を提供し、また、刊行について御快諾下さいました東京大学法学部法制史資料室並びに国立公文書館の関係各位、また、史料の筆耕解説にご協力下さいました研究者各位に深く感謝申し上げます。発刊の言葉と致します。

一九九一年(平成三)三月吉日